

Lecture

—前立腺癌の診療のコツ—

進行前立腺癌患者のQOLについて

三塚 浩二 東北大学大学院医学系研究科泌尿器科学分野講師



Q 進行前立腺癌患者におけるQOL／PROの意義について教えてください。

A 治療の多様化や高齢化が進むなかで、生命予後以外の苦痛や日常生活への影響、人生観や社会的支援などの要素も患者が治療法を選択するうえで重要な要素となっています。医師の経験や解釈に基づく判断には限界があり、もっと直接的に患者自身の評価や意向を治療選択に反映させようという動きが広まってきており、進行癌でもQOLやPRO (patient-reported outcome) を評価することが、われわれの診療や研究においても今後は求められるでしょう。

進行前立腺癌におけるQOLとは？

限局性前立腺癌の多くは長期の生存が期待できる一方で、治療による後遺症は生涯にわたって患者にとって大きな負担となるため、われわれ泌尿器科医は癌の根治だけでなく、QOL維持を治療のもう一つの目的として、さまざまな治療法や手技を開発・改良してきました。今や限局性前立腺癌の治療においてQOL評価は不可欠なのですが、進行癌ではどうでしょうか？ 進行癌では予後延長が重視され、治療薬による副作用には注意が払われるものの、QOL自体が積極的に意識されることはありませんでした。また、以前は進行前立腺癌に対する治療選択肢が限られていたことも、QOLが検討されにくい要因としてあったと推察されます。

ところが、ここ数年で前立腺癌に対する新規の薬物療法が次々と開発され、実臨床でも使用できるようになりました。治療に対する選択肢が広がる一方で、どの治療法も予後延

長効果は数ヶ月と限定的であり、有害事象や患者の負担も決して少ないものではないため、治療選択に悩むケースが増加しています。そこで、治療を選択するうえで予後延長の次に重要となってくるのがQOLと考えられます。他の治療法に比べ圧倒的に予後を延長し、かつ副作用の少ない治療法があれば話は別ですが、各治療法の間でそれほど予後延長効果に差がないとすれば、できるだけ患者の負担にならず、これまでと同じような生活を送ることができる治療法を患者が希望するのは、当然の流れといえるでしょう。また、進行癌におけるQOLが意識されるようになったもう一つの背景として、患者の高齢化が考えられます。新規の治療薬の情報は主に大規模臨床試験の結果に基づいていますが、そのような臨床試験に参加できる患者は、厳しい選択基準や除外基準をクリアした状態のよい患者であることが多いです。しかしながら、実際にわれわれが日常的に遭遇する患者は健康状態が良好とはいえない高齢の患者であることも多く、そのような患者にとっては治療薬による